様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　6 月　18 日現在

機関番号：３４５１１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2011
課題番号：20720126
研究課題名（和文）　方言文法の視点による推量表現の変化に関する研究

研究課題名（英文）　Changes in Usage of Conjectural Forms in Japanese Dialect

研究代表者
橋本　礼子　（舩木　礼子）（HASHIMOTO-FUNAKI Reiko）
神戸女子大学・文学部・准教授
研究者番号：00454736

研究成果の概要（和文）：日本語方言の推量表現形式の変化傾向を探るため、高知方言を対象に文法記述調査と自然談話のコーパス調査を行い、推量表現形式群の使用傾向を質・量の両面から分析した。前節要素の品詞に制限があった老年層のものとは異なり、若年層の推量表現形式群は接続上の制限が薄れて単純化している一方で、談話機能的に違う性質を持つものとして使い分けられる傾向にあることが確認できた。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the Kochi dialect which has two kinds of conjectural(/presumptive) forms, I analyzed the change of guess expression forms using grammatical description and a natural discourse corpus. As a result, on a young generation, the conjectural forms lost a restriction of connecting with a verb or an adjective, and were simplified. On the other hand, the new usage of guess expressions split into some different functions which are related to discourse.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：日本語学・方言学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：方言、推量表現、文法

１．研究開始当初の背景

日本語の推量表現の変化についての研究には、以下のような２つの流れがある。

①古典語を対象に、推量・意志表現体系や形式の変化を論じたもの

②現代方言を対象に、推量・意志表現形式が担う意味・機能の変化を論じたもの

このうち①で明らかにされたのは、時制的体系からムード的体系への体系変化と平行した、推量専用形式の析出という形式分化の過程であった。また②では、各地の方言で推量表現形式が確認要求表現にも用いられているという、確認要求表現が推量表現の機能的な派生用法と捉えられる段階の報告が多い。しかし、さらに進んだ変化の段階にあたる事象、つまり元々の推量表現形式を確認要求表現などの推量以外の意味で使い、推量表現として使わなくなっていくといった現象

については、まだ報告がほとんどない。
　そこで本研究では、推量表現形式の用法が徐々に変わり、推量として用いられなくなる現象に着目し、その実態解明を目指した。

２．研究の目的
　本研究では、ある文法形式（推量）の用法が徐々に変わり、元の意味としては用いられなくなる現象が観察できるものとして、高知方言を主な分析対象にし、意志・推量表現の形式分化（①）ではなく、推量形式の交替にともなう意味変化のプロセスを明らかにしようと考えた。
　また、変化の過渡期には複数の形式が競合状態になるために、単に形式の交替だけでなく、意味・機能の棲み分け現象も観察しうると予想される。このため、できるだけ詳しい、世代別の文法記述調査も実施し、文法的な枠組みの変化プロセスを詳細に検討することも目的の一つとした。

３．研究の方法
(1)　老年層・中年層・若年層の三世代への臨地面接調査によって、高知方言の推量・確認要求およびその周辺的意味を担う形式について、世代別に精密な文法記述を行った。これによって、各世代のもつ推量等の表現形式の意味・機能の異同を質的に確認した。
　なお、高知方言に限らず他方言においても、ある文法形式の意味が他の意味・用法へとずれこむ現象がある場合、文法的な枠組みの変化プロセス解明のために記述を行った。

(2)　高知市在住者の談話を採録し、推量・確認要求およびその周辺的意味を担う形式の使用傾向を計量的に把握した。

(3)　上記の(1)質的研究と(2)量的研究の結果を総合的に検討し、高知方言の推量・確認要求およびその周辺的意味を担う形式群の近年の変化傾向を分析した。

(4)　上記(3)の結論とこれまでの研究成果を総合し、高知方言の推量表現に関わる意味分野にみられる歴史的変化の方向性と変化の要因について分析を行った。

４．研究成果
(1)　三世代への臨地面接調査から、各世代のもつ推量表現等の形式の意味・機能の異同を質的に確認した。
　高知方言の推量表現形式-ロウと-ヂャロウ（または-ジャロウ）について、前節要素が(a)動詞・形容詞であれば-ロウを、(b)形容動詞・名詞であれば-ヂャロウ（/-ジャロウ）を使用するのが、幕末より後の資料に一貫して見られる用法であった。現代の高知市の老年層にはこの(a)(b)の区別がはっきりと保たれているが、(b)の形式が-ヤロウに替わりつつある。
　また否定推量表現の形式である-マイ類は高知市老年層ではほぼ使用されず、分析的表現-ナイロウが使われるようになっている。過去推量の形式-ツロウは完全に使われない。これも分析的表現である-タロウが使われる。過去形の方が伝統的形式が早く廃れたことには、-マイ類に意志用法およびそこから派生したと考えられる禁止用法があり、この禁止用法が現在も盛んに用いられていることが関係している可能性がある。
　なお先行研究では(a)の-ロウと-ヤロウの間に「根拠のある推量」か「軽い推量」かといった推量の質の差があるとの指摘があったが、今回の記述調査の中では、そうした意味的な違いは明らかにならなかった。
　老年層の使用状況に対して、中年層や若年層では、まず-ヂャロウ形式を完全に失って-ヤロを使うようになっていること、また-ロウは(a)の動詞・形容詞への接続が自然であるという使用意識は残しつつも、前節要素が動詞・形容詞の場合にも-ヤロを用いることが多くなっていることが指摘できる。(a)の環境において中年層・若年層の-ロウと-ヤロに意味的な差異が見いだせないので、中年層・若年層の推量表現形式については-ヤロの生起する環境が広がることによって接続上の単純化が進んでいるということができる。
　また中年層・若年層は-ヤロに加えて-ヤオという形式を用いるようになっているが、このヤオは(a)動詞・形容詞には問題なく使われるものの、現段階では(b)形容動詞・名詞には、単純推量の意味では使いにくいようである。このことから、-ヤオは(a)と(b)の接続上の制限が薄れていく変化に対して押し返す波のような反動的な現象である可能性がある。
　こうした結果をふまえて高知方言の推量表現形式の接続面に関してその変化を描いてみると、幕末の段階では古典語ラム由来の推量専用形式-ロウが動詞と助動詞（否定辞以外）につき、形容詞や形容動詞・名詞述語には古典語-ム由来の-ウや-デアロウ・-ヂャアロウがつくという区別であったものが、時代を下るにつれて徐々に-ロウのつく範囲が広がって形容詞終止形や否定辞-ナイなどにもつくようになり、また過去推量も-ツロウから分析的形式-タロウになることで-ロウの生起する範囲が広がった。これに、形容動詞や名詞述語としての-ヂャロウが成立したため、(a)動詞・形容詞には-ロウ、(b)形容動詞・名詞には-ヂャロウという図式ができあがった。これが今度は、-ヂャロウの変化

した形-ヤロによって-ロウの領域が浸食されつつある状況になってきたということができるだろう。
　ただし-ヤロがさらに変化した-ヤオは今後どのようなものになっていくか注意を要する形式だといえる。

(2)　高知方言について文法項目に着目した談話分析を適切に行うために、パイロットスタディとして方言談話における形式切換えに関する分析・考察をすすめた。これによって談話資料への効果的なタグ付けや用例収集方法などを検討した。

(3)　高知市在住の老年層と若年層の談話を２種類、60 分ずつ採録し、分析に適した文字化データ（コーパス）を作成し、バリエーションの関係にある推量表現の形式群について用法ごとの出現傾向を量的に分析した。
　これによって、複数の推量表現形式が、伝統的な高知方言においては前節要素の品詞（活用語）に制限されていたが、現在は文法的あるいは談話機能的に違う性質を持つものとして使い分けられる次のような傾向のあることがわかった。

①老年層のデータの特徴
・(b)において名詞＋ジャロウが減り、名詞＋ヤロウが増えている。名詞＋ジャオーも 1 例だが用例がある。
・(a)において、動詞・形容詞＋ヤロウがかなりの頻度で使われている。ただし、用法は知識確認の要求（潜在的共有知識の活性化・共通認識の喚起）に限られている。推量表現には-ヤロウが全く使われていない。また、過去＋ヤロウ、否定＋ヤロウはほとんど使われない
・-ヤオは、動詞＋ヤオ↑が 1 例のみ見られ、-ヤロウと同様に、知識確認の要求（潜在的共有知識の活性化・共通認識の喚起）で使われている。ただし、「あこに墓があるヤオ↑」のように、会話の中では命題確認の要求でも使われる。しかし、推量としては「ヤオ↓」を聞かない。談話中に推量表現の出現する頻度が低いためとも考えられるが、老年層ではヤオが推量で使いづらい可能性が高い。
・-ヤンカの使用が見られる。伝統的形式は-ヤカー・-ヤイカなので、他地域から流入した-ヤンカへ移行した可能性がある。
・興味深い現象として、会話の展開に効果的な用法など、推量表現形式が談話運用上の機能を担うようになったと考えられる、仮説や前置き的な知識を新規に受け入れさせる-ロウの用法が挙げられる。これは知識確認の要求（潜在的共有知識の活性化）の一部だと考えられるものであり、他方言の-ヤンカや-ジャン、-ダロや-ヤロにもあるものである。
　-ロウの用例を見ると、新規の情報というより、むしろ聞き手の予備知識でも受け入れ可能と見込める内容の情報というべきもので、聞き手にとって新規の情報かもしれないが聞き手が当然のこと・妥当なこととして受け入れて話し手と情報を共有することが会話を進める上で重要なときに用いられる傾向がある。会話の中で話し手の話を進めるために、その情報を聞き手にも共有させて、次へ次へと話を展開させる、談話展開上の会話促進の用法といえる。
・-ヤロのあいづち的な用法も興味深い。他方言の-ダロや-ヤロにもあるもので、知識確認の要求だが、直前の聞き手の発話から聞き手の認識が判明しており、それが話し手と同じであることを話し手が表明しつつ聞き手にも認識させようとするものである。これは話し手と聞き手とで認識が同じであることを強調するものとして効果的に働くようである。
・間投詞的な用法の-ヤロ↑、-ヤロ↓も興味深い例の一つとして挙げられる。これは他方言の-ヤンカや-ジャン、-ダロや-ヤロにない用法である。近いものとしては-ネ↑や-ダネ、-ダヨ↑のような間投助詞があるが、聞き手が聞いていることを確認しつつ話を盛り上げる際に、条件節や接続詞に-ヤロをつけて使っている。そこまでの話を聞き手が聞いていることを確認し、帰結節や新たな展開が次にくることを予測させている点で、帰結（メインの話題）をもったいぶっているようなニュアンス、あるいは次に大事な内容が話されることを期待させ、話し手の発話権を維持できるようにする機能があるように思われる。

②若年層のデータの特徴
・全般的に、ヤンの多用が目立つ。否定疑問文の-ナイ↑もよく使われている。マスメディアなどから近畿方言が流入した可能性がある。
・(a)において、動詞・形容詞＋ヤロウが少ししか使われておらず、動詞・形容詞＋ヤオも数例にとどまる。壮年層にあった-ヤカー、-ヤイカは 0 例、-ヤンカも少ない。代わりに、動詞・形容詞＋ヤンが多く使われている。
・(b)において名詞＋ジャロウは皆無であった。-ジャロウに替わり、名詞＋ヤロウと名詞＋ヤオが使われている。
・(b)の用例のうち、推量用法や知識確認の要求（同一化要求）、命題確認の要求では-ヤロも-ヤオもあるが、知識確認の要求（潜在的共有知識の活性化）では名詞＋ヤロや名詞＋ヤオの例が極端に少ない。このこと

から、(b)の環境においては、聞き手が当該知識をすでに持っていることを見込めることの確認には新形式の名詞＋ヤンが使われるようになったために、-ヤロや-ヤオはその用法が狭まり、名詞＋ヤロ/ヤオは推量や命題確認か、認識の同一化要求の表現に制限されたと考えられる。

・同一化要求のうち、次の二つには異なる形式を使い分ける傾向が見られる。
まず、話し手が聞き手の現在持っている認識に関係なく、単に話し手の認識（知識や主張や考えなど）を押しつけるだけの場合には名詞＋ヤロ↓が使われる。
これに対して、話し手が聞き手の現在持っている知識について異なる認識を持っており、話し手と聞き手の認識にずれがあることもわかっており、聞き手の認識を否定して話し手の知識（主張や考えなど）に塗り替えさせる場合、つまり聞き手に認識の更新を要求する場合は名詞＋ヤオ↑が多く、-ヤロが全く使われていない。こうした使用傾向から、単なる音声的な変異形にも見える-ヤロと-ヤオに、用法上の違いがあることが指摘できる。

このように、自然談話のコーパスの用例を量的に詳細に検討すると、推量表現およびその周辺的な表現を担う形式群は語形の交替や接続の単純化だけでなく、担う意味の分岐（棲み分け）や談話上の機能分化の傾向があることがわかった。特に推量や確認要求の表現形式が文末に生起するものであるため、終助詞的な機能に関わる用法を担う点も注目される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①舩木礼子（橋本礼子）、「京都市方言の接続助詞・終助詞「シ」の用法」、『論究日本文學』、査読 無、第 96 巻、2012 年、11-28 頁。

②舩木礼子（橋本礼子）、「カジュアルスタイルにおける方言切換え―形式の受容と切換えの要因―」、『神女大国文』、査読 無、第 22 巻、2011 年、85-66 頁（横書き 1-20 頁）。

③舩木礼子、「意志表現」、『方言文法調査ガイドブック』（国立国語研究所　全国方言調査委員会編）3、査読 無、2009 年、15-31 頁。

④舩木礼子、「希望表現」、『方言文法調査ガイドブック』（国立国語研究所　全国方言調査委員会編）3、査読 無、2009 年、33-47 頁。

⑤舩木礼子、「感動詞―詠嘆表現２―」、『方言文法調査ガイドブック』（国立国語研究所　全国方言調査委員会編）3、査読 無、2009 年、77-103 頁。

〔学会発表〕（計１件）

①舩木礼子、「カジュアルスタイルにおける方言切換え―移住先方言の受容と切換えの要因―」、日本方言研究会、第 88・89 回研究発表会、2009 年 10 月 30 日、島根県立産業交流会館くにびきメッセ

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
橋本 礼子（舩木 礼子）
（HASHIMOTO-FUNAKI Reiko）
神戸女子大学・文学部・准教授
研究者番号：00454736

(2)研究分担者

(3)連携研究者